第１章　埴生・津布田

埴生地区や津布田地区は、山陽小野田市の中でも古い歴史をもつ地区の一つです。

この地区の海岸線からは、対岸の九州や関門海峡に架かる関門橋を眺めることができ、見晴らしの良い景色が続いています。また、津布田海岸付近では消波ブロックが横一列に並んでいるなど、海岸線ならではの風景を見ることができます。

写真位置図　　国土地理院地図

今見ることのできる景色は、この地区がたどってきた歴史と結びつきます。

１．埴生のシンボル「糸根の松原」

下関市との市境から海岸線沿いの堤防を少し歩くと、北側奥に「糸根の松原」があります。この付近の風景は、干拓や土地利用に伴う開発によって一変しましたが、広い砂丘の上にクロマツが群生し美しい景観を作っていた松原の一部を、現在も見ることができます。

埴生地区は、古代には駅家がおかれ、昔から交通の要衝でした。中世になると、さまざまな人が往来したようです。旅をした人々は埴生の景色をどのように見ていたのでしょう。当時の紀行文には次のようにあります。

『道行きぶり』今川貞世（14 世紀後半）
（前略）それよりは山に分入て海のへたにうち出侍ぬ、こゝを羽ふとかや申なり、南はうら浪たかく立て、雲ふかき絶間に山ちかくみえたり、豊前国なるべし、北のやまは松しげりて、其前に社あり、八幡とぞ申なる、御垣の前に西東へつながれてしほもかよひ侍りけり、橋わたして大なる鳥居立たり、松ばらむらだちたり、住吉の御前のはまおぼえたり（後略）

「埴生の浦に出る。南方は浦浪の高く立ち騒ぐ彼方に豊前の山々を眺め、北方は松の木立の茂る山の前に八幡社（埴生八幡）があり、玉垣の前の東西に汐が通う小川には、橋が架かって大きな鳥居が建っている。松原も群がり立ちて（埴生糸根の浜が）摂津の住吉社の前の浜のようだ。」といった意味でしょう。

糸根の松原（国道 190 号沿いから）
令和 6 年（2024）撮影　★1

「糸根の松原」がある糸根公園には、昭和40年（1965）８月に誘致された観光施設「山陽パーク」がありました。先にプールの使用が始まり、その後、観覧車、ジェットコースター、プラネタリウムなどの遊戯設備が整えられていき、当時は多くの人でにぎわっていました。昭和40年代中頃から入場者も次第に減少し、昭和47年（1972）頃から遊具が随時撤去され、最後まで稼働していた天文館（プラネタリウム）は令和５年（2023）３月に閉館しました。プラネタリウムの投影機ＭＳ－１０は、現存するコニカミノルタ製最古のプラネタリウム１号機であり、コニカミノルタプラネタリウム株式会社の直営館プラネタリアＴＯＫＹＯにて静態展示されています。

山陽パーク（現糸根公園）　昭和42年（1967）
（シティセールス課提供）★1

天文館で使われていたミノルタプラネタリウムＭＳ－１０
令和3年（2021）撮影

コラム①　糸根の松原の名前の由来はあの歌人に関係あり！？

昔、平安時代の歌人和泉式部が糸根の松原で赤子を安産したと言い伝えられています。その和泉式部の伝説にちなみ「赤子寝の濱」、「愛寝の濱」と呼ばれていましたが、「愛寝」に「糸根」の字が当てられ現在の「糸根の松原」になったそうです。埴生地区には和泉式部の墓と言い伝えられている場所も、残されています。（23ページＭＡＰ参照）

糸根の松原　昭和26年（1951）
（厚狭図書館蔵）★1

また、この「糸根の松原」には、江戸時代の『地下上申絵図』にも記載がある「赤兼山」という山があります。日本で２番目に低い山だとか！？

２．埴生地区の漁業と海運

埴生地区では、江戸時代にはすでに投網漁、明治初期には手繰網を使ってのイカ漁や投網による鰯・ボラ漁が行われていました。昭和初期には漁業組合が組織されており、漁種や漁獲量も多く、漁業が盛んに行われていました。昭和７年（1932）に、糸根海岸に 47,000坪の養殖場が開設され、車エビ、カニ、貝類の養殖がされていました。

車エビの養殖場　昭和 26 年（1951）
（厚狭図書館蔵）

また、埴生浦は長府や赤間関、豊前へ渡海もできる港でもありました。中世の紀行文や江戸時代の古文書からも、人々が埴生から船に乗って移動する様子が読み取れます。

明治には、笠井順八によって小野田～埴生～赤間関の航路が開かれ、小野田丸と名付けられた船が往来し、交通手段として厚狭の人も利用していた記録があります。

３．祇園まつりと埴生芝居

埴生祇園まつりは、毎年７月下旬に行われ、神輿が糸根神社周辺地域や埴生漁港を２日間かけて巡行します。以前は７月の大潮の日に４日間かけて行っていました。最終日に行われる御神幸では、神輿を乗せた御座船で海をまわる船渡御があります。

埴生祇園まつりの際に上演される埴生芝居は、江戸時代に埴生の民家500軒のうち残ったのは３軒だけという大火など、多くの火事があり、後に難をおそれた村民が総鎮守埴生祇園社（現糸根神社）に芝居を奉納したことが起源だと伝えられています。

船渡御　昭和 50 年代（個人提供）★2

埴生芝居　令和 6 年（2024）撮影　★3

４．素晴らしい眺望　津布田地区

平松１号古墳付近からの眺め
令和６年（2024）撮影　★4

津布田海岸からは関門海峡や対岸の九州が見渡せ、また晴れた日には大分県の山々まで良く見えます。この海岸線に、６世紀後半から７世紀初頭に築造されたと考えられる円墳の「平松１号古墳」（表紙写真）があります。

この古墳は、地域の豪族の墓として支配者の権威を象徴するため、瀬戸内海を見下ろし遠く九州を見ることができるこの景勝地に造られたのでしょう。

津布田地区にある火ノ山には、眺望の良さからか、烽（狼煙場）があったと考えられ、下関の火の山から受け取り、小野田の竜王山（番屋ヶ辻）に伝えたとされています。

この烽は古代の烽燧制の起源とされ、狼煙によって急を伝える仕組みで、火が飛ぶような状態から「とぶひ」と呼ばれました。

現在、若山ゴルフクラブ梶コースがある場所には、昭和 28 年（1953）８月に沖合を埋め立てて操業を開始した「若山炭鉱梶鉱業所」という海底炭鉱がありました。炭鉱閉山後、埋立地を整備し、会社の同好会のためにゴルフ場が造られたのが始まりだそうです。近くの丘から海を眺めると、ゴルフ場が一望でき、炭鉱当時の写真と見比べてみるとその情景を感じることができます。

「スマイルコースト・ウォーク」のコースの中でもおすすめの場所の一つです。

若山炭鉱梶鉱業所　昭和 30 年代
（歴史民俗資料館蔵）★5

梶夕日スポット（夕陽ケ丘）から見た若山ゴルフクラブ梶コースと竜王山　令和６年（2024）撮影★6